

陸隴其の四書解釈の変遷について

浅井 邦昭

はじめに

十七世紀半ば清朝が成立すると、学术界にも新しい潮流が生み出されるようになった。その理由としては、当時の知識人が、學術思想の退廃が明朝の衰退を引き起こしたと認識し、その立て直しを図ろうとしたことが考えられる。これに加えて、清朝が朱子學振興に力を入れていたことも、政治的な要因として挙げられる。その結果、清初においては朝廷在野を問わず、經書の新解釈と思想の再構築を求めて、活発な學術活動がおこなわれたのである。

前稿では、呂留良を例にして、清初の知識人たちが八股文批評に託して、自己の解釈や思想を表明していた状況について検証した。そこで本稿では、陸隴其の四書解釈を取りあげ、知識人たちが八股文批評を介

して、どのように思想を確立していったのか考察してみることとする。彼が呂留良から影響を受けていたことについては、前稿ですでに触れた。彼の四書解釈は、時期によって変化している。そして、その変化には彼の経歴と八股文批評が関わっているのである。そこで陸隴其の四書解釈を分析することで、当時の學術活動における八股文の重要性を明らかにしたい。

陸隴其、初名は龍其、字は稼書という。浙江平湖の人である。二十代より館師をしながら、科挙を受験していた。康熙五年（一六六六）には郷試に及第し、九年（一六七〇）に四十一歳で進士及第を果たしている。及第後は嘉定知縣になったが、諱盜を理由に免職された。二十二年（一六八三）には、再び靈壽知縣を授けられ、着任後は善政を施している。それが評価され、二十九年（一六九〇）に四川道監察御史となったが、翌年には職を辞している。そして三十一年（一六九二）

彼は世を去ったのである。

生前の陸隴其は、周圀から高い評価を得られなかった。しかし彼の評価は、死後急速に高まっていく。彼が世を去った翌年の康熙三十二年（一六九三）には、康熙帝が江南学政に陸隴其を起用しようとしている。七品以下の場合、その死を上奏しないのが当時の慣例であったため、陸隴其の死を知らされなかったのである。その後、雍正二年（一七二四）になると、雍正帝により「醇儒」として、清朝の学者で唯一孔廟に從祀することが認められる。さらに乾隆元年（一七三六）には、内閣學士兼禮部侍郎が追贈され、「清獻」とおくりなされるに至ったのである。

陸隴其の再評価は、このように約五十年かけておこなわれた。彼が評価されたのは、その品行と学識を重んじられたためである。その中でも、特にその四書解釈は、清朝によって高く評価された。そこでまず彼の四書に関する著作とその評価について、簡単に見ておくことにする。

第一章 陸隴其の著作とその評価

陸隴其の著作は、現在『三魚堂文集』などを多く見

ることができる。四書解釈に関する著作だけでも、『三魚堂四書大全』をはじめ、『松陽講義』、『四書講義困勉録』、『續困勉録』、『問學録』など多数存在している。

陸隴其は生前『松陽講義』十二巻を刊行して、自身の四書解釈を著した。これは彼が靈壽知縣在任中に、弟子たちに対して講義したものをまとめたものとされる。ただし『松陽講義』は、全部で一百十八章にすぎず、彼の四書解釈の全貌を明らかにするものではなかった。そのため彼の死後、周圀によって彼の四書解釈がまとめられていく。『四書講義困勉録』三十七巻『續困勉録』六巻である。これは康熙三十八年（一六九九）、陸隴其の遺志に基づき、同族の陸公鏐を中心として、親族や弟子たちの手によって刊行されている。正統二編に分けたのは、陸隴其が解釈した時期と内容、体裁の違いによる。陸公鏐の識語によれば、正統三十七巻は順治十五年（一六五八）から康熙二年（一六六三）にかけての解釈をまとめたものとされる。これは後に見る『三魚堂四書大全』を編纂した時期に重なっている。その内容は、明の張振淵の講義を底本として、明末諸家の学説を附して、自身の解釈を示したものである。ただしその解釈はその後も変更されてお

り、康熙二年以後のものも収録されている。この変更部分については、陸公鏐は干支を記して時期を明らかにしており、解釈の変更は晩年まで続けられたことがわかる。

続編である『續困勉録』は、正編とはその体裁が異なるため、別に六巻にまとめられた。陸公鏐によれば、続編は康熙三年（一六六四）以後の学説とされ、その内容は朱子語類および呂留良と仇兆鰲の講義と批評などを中心に収録する。続編についても、変更を示す干支が多く記されており、正編と同じように、変更がしばしばおこなわれていたことがわかる。

『四書講義困勉録』と『續困勉録』は、同時に編集された著作であるが、清朝におけるこの二書に対する評価は大きく異なっている。この評価の差は内容に基づくが、同時に陸隴其評価の二つの側面を示していると言える。

第一は「醇儒」としての評価である。先に見たように、康熙年間以降、彼の学術思想は高く評価されるようになり、この傾向は乾隆年間に最高潮に達する。『四庫全書總目提要』（以下『提要』）は、彼の学識について「隴其の學は、一に朱子を以て宗と爲し、近儒の中に在りては最も醇正と稱せらる。（隴其之學、一

以朱子爲宗、在近儒中最稱醇正。）」（『提要』卷九十四「讀朱隨筆」）と評している。これは、彼を当時最も正統的な学者として遇しており、康熙以来の朝廷における陸隴其評価を受け継いでいると考えられる。さらに『四書講義困勉録』に対しても、その四書解釈の価値を認めた上で、次のように言う。

其の朱子を羽翼するの功は、胡炳文諸人に較べ、之れに過ぐることも有るも及ばざること無し。「其羽翼朱子之功、較胡炳文諸人、有過之無不及矣。」（『提要』卷三十六「四書講義困勉録」）

この提要では、胡炳文ら元明の儒者と比較しながら、彼が朱子学の正統を受け継いでいることを評価している。この『提要』の評価から、陸隴其が朱子学護持に努めた功臣として、当時認識されていたことがわかるのである。

ところが、陸隴其にはもう一つの側面が存在する。それは第二の「村學究」としての評価である。これは、彼が科挙受験のために四書解釈を提供したことがその根拠となっている。滝野邦雄氏は、当時の受験参考書が『四書講義困勉録』を下敷きにしたことを指摘した上で、「陸隴其の著作は、康熙以後の、科挙受験界に決定的ともいえる影響をあたえているのである。」と、

彼と八股文との関わりについて指摘している。この点について、陸隴其と交遊があつた李光地は、次のように評する。

近世の陸稼書、呂晚村、仇滄柱等の如きは、眞に村學究なり。名のりて程朱に遵ふと爲すも、何ぞ嘗て絲毫も發明すること有らん。「如近世陸稼書、

呂晚村、仇滄柱等、眞村學究。名爲遵程朱、何嘗有絲毫發明。」〔榕村續語録〕卷十六〔學〕

「村學究」とは郷村の塾師、館師を言う。彼らは八股文を教授することで、生計を立てていた。李光地は、陸隴其らをこの「村學究」ということばで評した上で、彼らの学識について、何も目新しいものがない浅薄なものとして斥けたのである。彼の評価には、在野の陸隴其らに対する、冷やかな視線が感じられる。そしてこの評価は、館師生活を送った陸隴其が、八股文と密接に関わっていたことに起因しているのである。

この側面については、『提要』にも同様の評価を見ることが出来る。先に見たように、『提要』は、正編である『四書講義困勉録』に対しては最高の評価を与えていた。しかしその続編に対しては「中には多く時文の評語を採録して、四書を狹視するに似たり。」〔中多採録時文評語、似乎狹視四書矣。〕〔提要〕卷三十

七「續困勉録」と、低い評価しか与えていない。『續困勉録』は正編とは体裁が異なり、八股文批評を多数収録して議論を展開している。ここから『續困勉録』は、四書の本旨を捉えていない、狭い解釈であると見なされたのである。

この二つの評価から、陸隴其の評価が高まった乾隆年間においても、八股文とのつながりについては否定的に捉えられていたことがわかる。つまり清朝においては、朱子学を護持した「醇儒」としての評価と、八股文と密接な関係を持つ「村學究」としての評価が対立する形で認識されていたのである。当時の常識から言えば、八股文は科挙及第という栄達を求めるものであり、経書解釈において、その影響を受けることは、当然否定すべきことであつた。しかし当時の学術活動は、八股文との関係を無視して論じることができない。陸隴其自身も、この二つの側面について、意識して分けていたわけではないであろう。そこで前稿でも取りあげた「慎獨」に関する彼の言説に注目して、経歴にしたがって、陸隴其がどのように自身の解釈を確立したのか見ていくことにする。

年譜によると、陸隴其がはじめて四書解釈を示したのは、康熙二年のこととされる。このころ彼は館師として、裕福な家に招かれては、その子弟に教授していた。彼は元來清朝の科挙に応じる意志がなかったと言う。これは彼の伯父が崇禎十二年（一六三九）に明朝に殉じたことによるらしい。したがって当初は「隱居友教之志」をもつて、館師として生涯を終えるつもりであったようである。

陸隴其の館師生活は、順治七年（一六五〇）二十一歳からはじまる。この時は嘉善の蔣文琢の邸宅に招かれている。それ以後、同県の李荊樸、李赤煒、松江の周孟輅、平湖の倪吉甫のところと、次々に移り住んでいた。館師として生活を送っているうちに、彼は当初の志を捨て、科挙に応ずるようになる。順治十四年（一六五七）、前年に生員となった陸隴其は、二十八歳になって初めて郷試を受験している。

ところが、彼はこの時及第することができなかった。陸隴其はこれをきっかけに『四書大全』を読みふけるようになったとされる。そして翌年の順治十五年（一六五八）より、足かけ六年かけて『三魚堂四書大全』をまとめたのである。

『三魚堂四書大全』は『四書大全』に点校を加え、必要に応じて蔡清『四書蒙引』、陳琛『四書淺説』、林希元『四書存疑』などを附したものである。康熙二年に成書しているが、すぐには刊行されなかった。康熙二十年（一六八二）に陸隴其自身の序が附けられ、三十七年（一六九八）になって、ようやく刊行されている。

彼が『三魚堂四書大全』を点校するきっかけとなつたのは、親族からの影響があつたようである。『長泖陸子年譜』は、編纂の経緯について、次のように記している。

（順治）十六年己亥、三十歳。始めて四書大全及び蒙引存疑等の書を編輯す。先生舟に附るに因りて、族人の上陸に遇ひ、講章を看るの道を問ふ。上陸曰く、大全を以て主と爲すも、然るに蒙引存疑が非ざれば、則ち大全もて呆物と爲さんと。先生因りて蒙引等の書を覓めて並びに之を閲る。大全を以て綱と爲し、蒙引存疑淺説及び顧麟士の節約を以て輔と爲す。諸説の醇なる者を探りて、額頭に附し、務めて朱子に折衷す。此くの如く凡そ六年なり。今坊中刻する所は、即ち其の本なり。

一（順治）十六年己亥、三十歳。始編輯四書大全

及蒙引存疑等書。先生因附舟、過族人上陸、問看講章之道。上陸曰、以大全爲主、然非蒙引存疑、則大全爲呆物矣。先生因覺蒙引等書並閱之。以大全爲綱、以蒙引存疑淺説及顧麟士節約爲輔、採諸説之醇者、附於額頭、務折衷於朱子。如此凡六年。今坊中所刻、即其本也。」（陸隴其の序では、順治十五年から編纂を始めたとする。）

彼は鄉試落第をきっかけとして、『四書大全』に傾倒するようになった。『四書大全』に取り組んだのは、より良い八股文を執筆するためであつたと考えられる。『三魚堂四書大全』は、その研究の成果として編まれたのである。ただし『四書蒙引』などを附したのは、陸隴其の発明ではない。年譜に見られるように、陸上陸の導きによって、これらの書を探し求めている。したがって『三魚堂四書大全』の企画は、同族の影響が色濃く表れたものと言えよう。さらに陸隴其の交際についても、その範囲はそれほど広くなく、また彼の四書解釈に影響を与えた人物もそれほど多くなかったと推測できるのである。

それでは『三魚堂四書大全』において、陸隴其はどのような解釈をしていたのだろうか。この書において、彼は自分の解釈を明らかにしていない。あくまでも点

校という作業だけに止まっている。しかし彼が点を施した部分については、自身の解釈と密接に結びついていたはずである。そこで加点部分を中心に、『三魚堂四書大全』における『大學』の「慎獨」について分析してみることにする。

「慎獨」ということばは、『大學』「誠意章」四節のうち「所謂誠其意者節」（首節）および「小人閒居節」（第二節）に見ることができる。この「慎獨」については、明朝以来知識人たちに注目されるようになり、さまざまな議論が展開された。陸隴其もまたこの工夫について、強い関心を持っていたようである。彼の弟子の侯開國は、師の学説について次のようにまとめている。

先生一生の造詣、務むるは躬行實踐に在り。下學上達の旨を守り、慎獨存誠の學を爲なむ。「先生一生造詣、務在躬行實踐。守下學上達之旨、爲慎獨存誠之學。」（『三魚堂文集』「陸稼書先生三魚堂文集序」）

彼にとつて「慎獨」は「存誠」とともに、学問の重要な柱であつた。実際に、陸隴其の「慎獨」解釈は、時期により若干の変化を見ることができ、彼が常にこの工夫に関心を持っていたことがわかるのである。

そこで『三魚堂四書大全』における「慎獨」を具体的に
見ていくことにする。まず「獨」について取り上げ
ると、『三魚堂四書大全』は「獨」を心の認知作用と
見なしている。陸隴其は「新安陳氏（陳櫟）」の小註
に対して、次のように点を加えている。

【一】此獨字、指心所獨知而言。非指身所獨居而言。

「此の獨字は、心の獨り知る所を指して言ふ。身
の獨り居る所を指して言ふに非ず。」（『三魚堂四
書大全』「大學大全章句」）

【二】如與衆人對坐、自心中發一念、或正或不正、
此亦是獨處。「如し衆人と對坐するも、心中より
一念を發し、或ひは正しく或ひは正しからざれば、
此れも亦た是れ獨處なり。」（同上）

【一】の加点から、陸隴其は「獨」を心の状態であ
ると考えていたことがわかる。「獨」については、「獨
居」という場所と見なす解釈も存在していた。これは
第二節「小人閒居爲不善」において、「閒居」を朱子
が「獨居」と解釈することを意識している。この解釈
によれば、「小人閒居爲不善」は、そのまま「慎獨」
がおこなわれない状態を指すことになる。しかし陸隴
其は「獨」とは独りである場所ではなく、他者が認知
できない心の作用であると考えた。これは首節と「小

人閒居爲不善」を直截結びつけていないことを示して
いる。だからこそ、よりはっきりさせるために、【二】
の陳櫟の解釈にも点を施したのである。【二】では、
他人と同席している場合でも、「獨」と呼ぶことがで
きることを認めている。この部分に点を加えることで、
陸隴其は「獨」が対人関係の問題ではなく、認知の問
題であることを明らかにしたのである。

さらに「慎獨」について見てみると、彼は「慎獨」
の工夫を「誠意」と同じ工夫と考えていた。「誠意章」
において、彼は首節の「雲峯胡氏（胡炳文）」の小註
に、次のように点を加える。

獨字便是自字、便是意字。所以中庸論誠首尾言慎
獨、此章論誠意亦兩言慎獨。「獨字は便ち是れ自
字なり、便ち是れ意字なり。中庸の誠を論ずるに
首尾 慎獨を言ひ、此の章 誠意を論ずるに亦た
兩たび慎獨を言ふ所以なり。」（同上）

胡炳文は、「獨」を「自」または「意」として解釈
する。「自」とは「自欺」「自慊」の「自」であり、
「意」とは「誠意」の「意」である。つまり彼は「慎
獨」とは、取りも直さず「毋自欺（自分を欺くことが
ない）」「自慊（自分で快く感じる）」「誠意」と同じ工
夫であると解釈したのである。陸隴其もまたこの解釈

を支持していた。彼はこの解釈を補強するために『四書蒙引』を附して点を加えている。

愼○其○獨○便○是○母○自○欺○。母○自○欺○便○是○必○自○慊○。必○自○慊○便○是○誠○其○意○。「其の獨を愼しむとは便ち是れ自らを欺くこと母きなり。自らを欺くこと母しとは便ち是れ必ず自らを慊くするなり。必ず自ら慊くすとは便ち是れ其の意を誠にするなり。」(同上)

胡氏の注と比較すれば、その立場はよりはつきりするであろう。陸隴其は、この二つの注に点を施すことで、「誠意」との関係を示したのである。以上の議論をまとめると、彼の「愼獨」は、自分のみ認知できる心の動きを謹慎することであり、さらにこれこそが「誠意」の工夫そのものであると解釈したのである。

ここまで『三魚堂四書大全』における解釈を分析してきた。ところが『三魚堂四書大全』については、不完全な解釈であると当時から認識されている。これは陸隴其自身も「舊本四書大全序」(『三魚堂文集』巻八)において認めている。それによれば、彼は進士及第後、諸家の書籍を多く読む機会を得たが、そこで『三魚堂四書大全』の基準が必ずしも適当でないことに気づいたと言う。実際、彼の周辺でも、『三魚堂四書大全』は陸隴其本来の学識を反映していないと見なされてい

たようである。それを端的に示しているのが、弟子の趙愼微と何焯との間に交わされた、次のような会話である。

何云ふ、先生の根柢深厚なれども、何ぞ是の書の去取、大いには楊顧の説約より遠からざらんやと。趙困りて序を出だして之れに示す。何恍然として曰く、吾れ固より先生の學是に止まらざるを疑ふ。此の序を讀まざれば、幾んど先生を失なはんと。「何云、先生根柢深厚、何是書去取、不大遠於楊顧説約耶。趙困出序示之。何恍然曰、吾固疑先生之學不止於是。不讀此序、幾失先生矣。」(『陸稼書先生年譜』卷上「癸卯二年」)

何焯は『三魚堂四書大全』の取捨選択が適當でないことをいぶかしく思い、それに対して趙愼微は序を示して、陸隴其が点校の当時まだ十分にその解釈を確立していないためであると、師のために弁明している。こうした評価から考えると、『三魚堂四書大全』は、陸隴其における最も初期の未熟な段階の解釈と言えるのである。

それでは、彼自身は『三魚堂四書大全』当時の「愼獨」解釈をどのように評価していたのであろうか。この問題について、彼自身は『四書講義困勉録』で次の

ように述べている。

此の節 余初め皆な誤りて看る。近來の晚村最も説くこと明らかなるを得たり。癸亥八月 八科文を定むるに因りて、舊時に寫す所を將つて刪去すれば、甚だ快し。大抵舊時は只大全の雲峯胡氏一條の誤まる所と爲る。然れども雲峯の意も恐らく亦た是れ此の解の如くならず。「此節余初皆誤看。近來晚村最説得明。癸亥八月因定八科文、將舊時所寫刪去、甚快。大抵舊時只爲大全雲峯胡氏一條所誤。然雲峯意恐亦不是如此解。」(『四書講義困勉録』卷一「所謂誠其意者節」)

「癸亥八月」とあることから、これは早くとも康熙二十二年(一六八三)以後の文章にちがいない。この年、彼は靈壽知縣に任命されており、後に『松陽講義』をまとめるようになる。彼は自身の解釈について、以前は胡氏の注によって、誤解してしまつたと述べている。胡氏の注とは、先に見た「獨字便是自字、便是意字。」である。陸隴其はこの注に基づくことをやめ、呂留良の解釈に基づくようになった。この当時になると、『三魚堂四書大全』における解釈は、すでに大きく変化してしまつたのである。その結果、胡炳文の注についても、『松陽講義』では次のように評するよう

になる。

雲峯胡氏謂へらく獨字は便ち是れ自字なり、便ち是れ意字なりと、尚ほ分明たるを欠く。獨は未だ嘗て意に非ずんばあらざるも、但し是れ意の起頭處なり。故に朱子は或問に於いては、慎獨二字を將つて、只だ講ずるに自欺の内に在り。而れども章句に於いては、則ち另講を提出す。蓋し互ひに相ひ發明するならん。「雲峯胡氏謂獨字便是自字、便是意字、尚欠分明。獨未嘗非意、但是意之起頭處。故朱子於或問、將慎獨二字、只講在自欺内、而於章句、則提出另講。蓋互相發明也。」(『松陽講義』卷一「所謂誠其意章首節」)

ここでは胡氏の注では、解釈がはつきりしないことを指摘している。その上で、朱子が『大學或問』では「自欺」とともに「慎獨」を論じているが、『大學章句』ではそれぞれ分けて解釈しているのは、兩者の關係を明らかにしていると言う。『松陽講義』になると、陸隴其は「慎獨」を「誠意」と同一視することはなく、兩者の關係について「慎獨」を「誠意」のはじまりと位置づけている。『三魚堂四書大全』編纂當時は、あくまでも『四書大全』と『四書蒙引』『四書存疑』などと比較しており、『四書大全』の注釈からは

大きく外れることはなかった。ところが『四書講義困勉録』で述懐しているように、彼は四書解釈において、『四書大全』から外れる解釈もするようになっていく。そのきっかけとなったのが、八股文批評である。彼は康熙三年以降、八股文批評との関係が密接になっていく。康熙三年以降の解釈を、陸公鏐らが『續困勉録』として分けたのも、その理由に拠ろう。そこで次に『四書講義困勉録』でも名が出た呂留良を中心に、八股文批評が彼の解釈に与えた影響について論じることにする。

第三章 八股文批評との関わり

康熙二年に『三魚堂四書大全』がまとめられたが、この年陸隴其は再び郷試に応じている。しかし、この郷試もまた及第することができなかった。これ以後、彼は八股文の執筆にさらに力を入れるようになり、八股文批評とも密接な関係を持つようになっていく。そこで本章では、呂留良からの影響を中心にして、当時の学術界の状況を考慮しながら、陸隴其がどのように解釈を変更していったのかを考察してみる。

呂留良と陸隴其の交遊については、容肇祖にすでに

詳しい論考が存在する⁴⁾。そこで今回は、二人の八股文批評による影響についてのみ論じることにする。呂留良は当時すでに著名な八股文選家として、大きな影響力を持っていた。陸隴其も八股文に取り組む拳子の一人として、呂留良には敬意を払っている。年譜によると、陸隴其の八股文は、当初「才情横軼」であったため、周囲から評価されなかったとされる。そこで彼は、王鏊や唐順之などの大家の作品に没頭するようになった。さらに彼は自分の八股文について呂留良に意見を求めている。

厥の後 全稿を以て之れを呂晚村に質す。晚村大いに嘆賞を加へ、且つ言ふ此の力量を具へずんば、正法眞藏に歸すること能はずと。誠に知言なり。

「厥後以全稿質之呂晚村。晚村大加嘆賞、且言不具此力量、不能歸正法眞藏、誠知言也。」(『長泖陸子年譜』「康熙二年」)

これが、現在見ることができ二人の交際の始まりである。呂留良は、陸隴其の作品に目を通した上で、その才能を高く評価した。この時の呂留良の批評は、現在でも一部見ることが出来る。『呂子評語』に「陸龍其文」として収録されているのが、それである。その一つ「告子陽明辨」を取りあげ、二人の交遊につい

て見てみることにする。

「告子陽明辨」は、もともと『孟子』「告子曰不得於言」一章の自記として執筆された。この文章では、陸隴其は王陽明を告子になぞらえて、その虚妄を批判している。『松陽鈔存』巻下によれば、これは順治十八年（一六六一）康熙元年（一六六二）の間に執筆されたらしい。その後、すぐ呂留良の手に渡ったのである。この自記について、呂留良は百年來の學術と政治の混乱を嘆きながらも、このような作品が執筆されたことに希望を見いだしている。

此の文の自記を讀みて、之れが爲めに驚歎し、深く此の理の天下に在りて、終に得て磨滅せざれば、亦た世運陽生の一機たるを幸ふ。「讀此文自記、爲之驚歎、深幸此理之在天下、終不得而磨滅、亦世運陽生之一機也。」（『呂子評語』正編卷二十六「孟子公孫丑上」）

呂留良は、陸隴其の陽明学批判を高く評価している。この点で、二人の立場は一致していた。二人の共通点は、後に二人が面談した時の話題からも推測することができる。彼らは生涯ただ一度実際に面談する機会があった。それは康熙十一年（一六七二）五月のことである。『松陽鈔存』巻下によれば、この時彼らは學術

と人心について語り合ったとされる。

この時、彼らは五つの問題について論じている。第一は、当時の人心が荒廢したのは、陽明学の流行がもたらしたこと。第二は、顧憲成や高攀龍らが心性については陽明学を斥けているが、その解釈から抜け出ることができなかったこと。第三は、蘇軾の学問は後人を誤らせている。朱子の「雜學辨」が彼を批判しているのは、最も功績があること。第四は、学問を修める際には、可と不可との境界をはっきりさせる必要があること。最後は、張履祥は劉宗周の弟子だが、必ずしも師の学問に従ってはいないこと。ここからわかるように、彼らの関心は、朱子学の宣揚と陽明学の排除にあった。陸隴其は、この時の感想として「一時の言、皆な關係有り。予の深く佩服する所なり。（一時之言、皆有關係。予所深佩服。）」と言う。この中で、注目すべきは最後の議論である。これは当時の流行と深く関わっている。劉宗周は、清初の知識人に大きな影響力を持つ人物である。二人は彼の学問について、特に脅威に感じていたようである。前稿において、呂留良の八股文批評が、劉宗周の「慎獨」への批判を含んでいることを検証した。ここでは劉宗周の解釈を紹介し、陸隴其がどのように批判したかを見ておくことにす

る。

劉宗周は「先生の學は、慎獨を以て宗と爲す。（先生之學、以慎獨爲宗。）」（『明儒學案』卷六十二「戡山學案」）と弟子の黃宗羲が評しているように、「慎獨」を思想の中心に位置づけていた。彼は「慎獨」の「獨」について「獨は一なり。形而上なる者之れを性と謂ひ、形而下なる者之れを心と謂ふ。（獨一也。形而上者謂之性、形而下者謂之心。）」（『劉子全書』卷十「學言上」）と解釈している。劉宗周は「獨」を心性の根源であると同時に、万物を貫く道理であると考えていたのである。彼はこれを「獨體」と名付けた。これは「獨」を本体論から解釈しようとするものであった。

彼はさらに「慎獨」と『大學』八条目との関係についても、独自のとらえ方をしている。八条目とは「格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下」のことを言い、本来「慎獨」は「誠意」の工夫にすぎない。しかし、劉宗周は「獨」を心性の根源と位置づけたため、「慎獨」の重要性を高める必要があった。そこで彼は「慎獨は是れ學問の第一義なり。慎獨を言へば、身心意知家國天下は一齊に俱に到る。（慎獨は學問第一義。言慎獨、而身心意知家國天下を一齊到。）」（『劉子全書』卷十「學言上」）と云うようになる。彼

は「慎獨」を八条目すべて含むものとして位置づけ、學問の最重要課題としたのである。

劉宗周の解釈に対し、陸隴其は『大學章句』に基づきながら、批判を展開している。問題になったのは、やはり「誠意」であった。

黃太沖の文を閲、山陰の學を知る。其の病只だ朱子の所謂之れを析^わければ其の精を極め、之れを合はせれば其の大を盡くすの二語を知らざるに在り。故に朱子は八條目に分かつも、而れども山陰は則ち誠意を以て了義と爲して、曰く致知は此れを致すなり。格物は此れを格すなりと。朱子は主敬を以て八條目の外に置くも、而れども山陰は則ち誠意を以て主敬に當つ。「閱黃太沖文、知山陰之學。其病只在不知朱子所謂析之極其精、合之盡其大二語。故朱子分八條目、而山陰則以誠意爲了義、曰致知致此也。格物格此也。朱子以主敬置八條目之外、而山陰則以誠意當主敬。」（『三魚堂謄言』卷二）

劉宗周は「誠意」を學問の奥義と位置づけた。そうなると「格物致知」もまた「誠意」に従属する工夫となつてしまふ。これに対して、陸隴其は、彼のように解釈すると、朱子が八条目を分けた意図から外れてい

ると批判を加えた。呂留良同様、陸隴其の批判もまた劉宗周の「慎獨」「誠意」に向けられていたのである。

陸隴其は劉宗周批判の根柢を、呂留良の批評に求めるようになった。その批評は、多くが王陽明と劉宗周への批判が動機となつてゐるからである。『續困勉錄』を見ると、呂留良の批評を多数収録することで、陸隴其もまたこの解釈を受け入れていったことがわかる。

しかしその結果、彼は四書解釈の変更を迫られるようになった。呂留良の批評と『三魚堂四書大全』の解釈との間で、矛盾が生じたためである。両者の間にどのような問題が生じたのか、また陸隴其はどう対処したのか、二つの論点からまとめてみる。

まず第一は、「慎獨」と「小人閒居爲不善」との関係である。初期の解釈において、彼は陳櫟の注を採用し、「獨」を心の作用と考えていた。ところが『續困勉錄』では「評癸丑房書首節文」として、呂留良の批評を取りあげてゐる。

註中の下の一つの地字を看れば、則ち獨字 人の見ざる所の時境を指して言ふ。即ち下節の閒居と相ひ照らす。心に獨體有り、知に獨覺有りと謂ふに非ず。「看註中下一地字、則獨字指人所不見之時境言。即與下節閒居相照。非謂心有獨體、知有

獨覺。」(『續困勉錄』卷一「大學」)

これは朱子の「獨者、人所不知而已所獨知之地也。」に基づく議論である。呂留良は「獨」を時間的、空間的狀況と解釈して、劉宗周の「獨體」を批判している。しかし彼は同時に『四書大全』の陳氏の解釈も否定しているのである。陳氏は「獨」を「閒居」とは解釈しない。彼は「獨」とは心の作用であり、「閒居(獨居)」と同じ状況と見なすことはできないと考えていた。これに対して、呂留良は「獨」を「閒居」と同一視し、両者を結びつけることで、第二節との関連性を強調している。陸隴其はこの批評の影響を受けて、呂留良を支持するようになっていく。後年の『松陽講義』では、さらにその支持を鮮明している。そこでは、彼は陳氏の解釈をまず紹介した上で、次のように言う。

晩村は却つて此れを主ぼす。謂へらく閒居は即ち獨なり。不善を爲すは即ち獨を慎まざるなり。十目十手は、只だ是れ人之れを知らずして己獨り之れを知るのみ。己之れを知れば則ち人必ず之れを知るのみと。晩村の説 直捷に似たり。蓋し獨は只だ是れ一箇の獨なるのみ。但だ上文の獨を言ふは則ち己の獨り知る所に就きて言ひ、十目十手は則ち説きて人の共に知る所に到るのみ。「晩村

却不主此。謂閒居即獨也。爲不善即不愼獨也。十目十手、只是人不知之而已獨知之。已知之則人必知之耳。晚村之說似直捷。蓋獨只是一箇獨。但上文言獨則就已所獨知言、十目十手則說到人所共知耳。」〔松陽講義〕卷一「大學」)

兩者の解釈を比較した上で、彼は「直捷」と評して、呂留良の解釈を支持する。ここでは首節の「愼獨」を、「小人閒居爲不善」の第二節のみならず、「曾子曰十目所視十手所指其嚴乎」の第三節まで結びつけて解釈している。これは『續困勉錄』の解釈から、さらに発展したものと見えよう。分節を超えて解釈するのは、八股文執筆時によく見られる手法である。これは陸隴其の解釈が、八股文との関係が密接になっていることを示すのだろう。彼が呂留良の八股文批評を支持したのは、その解釈がもともと劉宗周を批判しているからである。ただしそれは八股文批評という性格ゆえ、必ずしも『四書大全』の解釈と一致するものではない。陸隴其は八股文批評を受容することで、初期の解釈を否定しなければならなかったのである。

先に見た胡炳文の解釈についても、彼は同じように解釈の変更を迫られている。これもまた劉宗周批判の要請に基づくものである。『續困勉錄』では、呂留良

の次のような批評を収録する。

用晦又た曰く、誠意は只だ是れ其の方を實用するのみ。力を用ひること實ならざる者もて自欺と爲し、欺を去るの法は愼獨に在り、愼獨即ち誠意に非ざる所以なりと。「用晦又曰、誠意只是實用其方。所以用力不實者爲自欺、去欺之法在愼獨、非愼獨即誠意也。」〔續困勉錄〕卷一「大學」)

呂留良は「誠意」とは、「格物致知」によつて獲得した方策を実践する工夫にすぎないと解釈する。これは劉宗周が「誠意」を学問の最重要課題と位置づけたことに對する批判であろう。その上で、彼は「愼獨」についてもそのまま「誠意」と見なすことはできないと考えた。彼は「誠意」を実践できない状況が「自欺（自らを欺く）」なのであり、その処方箋こそが「愼獨」であると解釈したのである。その結果、前章で触れた胡氏の注は否定されている。なぜなら胡炳文は「獨字便是自字、便是意字。」と注することで「愼獨」と「誠意」とを同じ工夫と考えているからである。胡氏の解釈と比較すると、呂留良の「愼獨」は「誠意」との関係をよりはっきりさせたものと言える。陸隴其は、この批評について「畢竟用晦に依りて欺慊の説に就くを是と爲す。（畢竟依用晦就欺慊説爲是。）」と

評価している。ここでもまた呂留良の八股文批評を支持すること、初期とは異なる解釈を示したのである。

前章で見たように、陳櫟や胡炳文の解釈は、『三魚堂四書大全』における「慎獨」の重要な柱であった。

しかし呂留良の八股文批評を受容する中で、陸隴其の解釈は変化を見せるようになる。これは彼が館師として、また挙子として八股文と深い関わりを持っていたからであろう。だからこそ李光地はその解釈を「村學究」と評したのである。陸隴其は靈壽知縣在任中も弟子たちに四書講義をおこない、その成果は『松陽講義』にまとめられている。その解釈を見ても、八股文批評からの影響は、科挙及第後も薄れることがなかったことがわかるのである。

第四章 陸隴其における『四書大全』

前章では、陸隴其が八股文批評の影響を受けながら、解釈を変化させていった過程について論じた。これは彼が科挙との関わりにおいて、当時の流行を意識しなければならなかったためである。その中でも、呂留良の批評は、彼の解釈に特に大きな影響を与えたのであった。ただし、この二人の解釈には異なる部分も見受

けられる。その大きな違いとして『四書大全』に対する評価が挙げられる。

陸隴其は「慎獨」の解釈において、初期の解釈を否定し、呂留良支持へと大きな変更を加えた。彼は変更した理由について、胡炳文の注によって誤ったためとする。ただし彼は胡氏の解釈を完全に否定したわけではない。彼は「然雲峯意恐亦不是如此解。」と言っており、必ずしも誤解の責任を胡氏に求めてはいない。

『松陽講義』でも「尚欠分明」と評しており、完全否定まではしていないのである。これは彼が解釈を変更してからも『四書大全』そのものを否定していなかったことを示している。彼は後年も常に『四書大全』を規範として意識しており、調停できる部分については、できるだけ調停しようとした。こうした態度は、呂留良には見ることができない。そこで本章では、陸隴其と『四書大全』との関係について見ていくことにする。

陸隴其は三十四歳で『三魚堂四書大全』をまとめたが、それ以後も『四書大全』の重要性については繰り返し言及している。彼は晩年、読書の階梯を次のように述べている。

目下の用功、場前に多く文を作るを要するに比せ

ずして、須らく書を見るを以て急と爲すべし。毎日應に四書一二章を將つて潛心玩味し、一字として放過すべからず。先づ白文を將つて自ら理會すること一番にして、次に本註を看、次に大全を看、次に蒙引を看、次に存疑を看、次に淺説を看。

此くの如く工夫を做さば、一部の四書既に明らかになれば、他書を讀めば便ち勢は破竹の如し。「目下用功、不比場前要多作文、須以看書爲急。毎日應將四書一二章潛心玩味、不可一字放過。先將白文自理會一番、次看本註、次看大全、次看蒙引、次看存疑、次看淺説。如此做工夫、一部四書既明、讀他書便勢如破竹。」(『三魚堂文集』卷六「與席生漢翼漢廷」)

讀書において、彼はとりわけ四書的重要性を指摘している。さらにその讀書法として、白文、『四書章句集注』、『四書大全』、『四書蒙引』、『四書存疑』、『四書淺説』の順に読んでいくことを薦めている。この書簡から、陸隴其の『四書大全』に対する考え方は、『三魚堂四書大全』編纂当時から一貫していることがわかる。八股文批評によって、彼の四書解釈は変更したもの、これはあくまでも表層的なものである。その解釈の基本姿勢については変化しなかったと言える。こ

の点については、彼の立場は呂留良の認識とは大きく異なっている。二人の違いは、その処世態度の差に結びつくものであろう。そこでまず当時の『四書大全』に対する認識について、簡単にしておくことにする。

明朝において、『四書大全』は四書解釈の基準として重視されてきたが、清朝になるとしばしば批判されるようになっていく。批判の中心となったのは、明の遺老たちである。顧炎武の『日知録』や王夫之の『讀四書大全説』などには、『四書大全』に対する批判を見ることが出来る。彼らはその編纂の粗雑さを批判したが、呂留良にも同様の批判を見ることが出来る。

永樂の間、四書大全を纂脩す。一時の學者は、難を啣くはんずる爲に殺戮されて殆ど盡く。塵かに胡廣楊榮等を存するのみにして、苟且庸鄙の夫、其の事を主つかさどる。故に摭掇する所、多く傳注と相ひ謬戾す。甚しくは朱子の語に非ざるも之れを誣入する者有り。蓋し通義の誤りを襲ひて正すことを知る莫きならん。自餘蒙引存疑淺説の諸書、紛然として雜出するも、拘牽附會にして、破碎支離たり。其の得る者は、以て訓詁の精を逾ゆること無く、其の失する者は、益々以て後世の惑ひを滋す。上は以て程朱の餘緒を承くること無く、下は適あただ異

端の非笑する所と爲るに足る。「永樂間、纂脩四書大全。一時學者、爲靖難殺戮殆盡。塵存胡廣楊榮等、苟且庸鄙之夫主其事。故所摭掇、多與傳注相謬戾。甚有非朱子語而誣入之者。蓋襲通義之誤而莫知正也。自餘蒙引存疑淺說諸書、紛然雜出、拘牽附會、破碎支離。其得者、無以逾乎訓詁之精、其失者、益以滋後世之惑。上無以承程朱之餘緒、下適足爲異端之所非笑。」(『呂晚村先生文集』卷五「程墨觀畧論文三則」)

呂留良は學識のない胡廣、楊榮らが編纂に当たったことを批判し、その上で後世の學術の混亂をもたらしたとする。その上で『四書蒙引』『四書存疑』『四書淺說』についても、牽強附會であり支離滅裂であると断じている。この点から見ると、彼の議論は、先に見た陸隴其の読書法を否定するものであった。呂留良が批判したのは、『四書大全』が學術を混亂させ、ひいては明朝の衰退をもたらしたためであった。彼らの批判によつて、明朝以来の『四書大全』地位は次第に揺らぎはじめていったのである。

陸隴其は、顧炎武や呂留良らの學問に対しては十分に敬服している。ただしその一方で、彼らの批判的な態度には違和感を感じていたらしい。彼の日記では、

その違和感について次のように言う。

偶々思へらく近日の魏冰叔、汪荅文、顧寧人の如きは、卓然たりと謂ふべし。而れども皆な傲僻の病を免れざるは、其の原程朱より入らざるを以てなり。呂東莊は程朱より入る。而れども亦た此れを免れざるは、則ち消融未だ盡きざればなり。

「偶思如近日魏冰叔、汪荅文、顧寧人、可謂卓然矣。而皆不免傲僻之病、以其原不從程朱入也。呂東莊從程朱入矣。而亦不免此者、則消融未盡也。」(『三魚堂日記』卷五)

陸隴其は顧炎武や呂留良の學術について、「傲僻」と評している。その理由は、彼らの學問が朱子學に基づいていなかったり、朱子學を十分に消化していないからであった。この評価には、彼らが『四書大全』に對して批判していたことも含まれているであろう。陸隴其にとつて、『四書大全』は朱子學の正統を繼承するものであり、その価値は十分に認められるべきものであった。だからこそ呂留良らの批判に傲慢さを感じ取ったのではないだろうか。呂留良の先の批判についても、陸隴其は『問學錄』において文章を引用した上で、次のように弁護する。

愚謂へらく晚村の言は、禪學を惡みて咎を何王金

許以及明初諸儒に追ふ。乃ち春秋の備ふるを賢者に責むるの義にして、亦た本を抜き源を塞ぐの論なり。然るに諸儒の拘率附會、破碎支離にして、潛かに師説に咻く者は誠に之れあるも、其の程朱の理を發明し以て來學に開示する者も、亦た少なからず。「愚謂晚村之言、惡禪學而追咎於何王金許以及明初諸儒。乃春秋責備賢者之義、亦按本塞源之論也。然諸儒之拘率附會、破碎支離、潛畔師說者誠有之、而其發明程朱之理以開示來學者、亦不少矣。」(『問學錄』卷二)

彼は『四書大全』の問題点について認めてはいるが、程朱の解釈を明らかにした功績については高く評価している。これは呂留良らが、その価値を認めずに激しく批判したのとは一線を画している。これは彼が科挙に応じたことと無関係ではないだろう。遺老たちと異なり、科挙に応じるならば、『四書大全』の解釈を無視することはできないからである。そこで、次に李光地との交遊に注目して、『四書大全』に対する当時のもう一つの評価について考えてみることにする。

陸隴其は康熙九年に進士に及第した。この時、李光地もまた及第を果たしている。陸隴其はその後官途において李光地と密接な関係を持っていくが、彼らは四

書解釈についても交流を持っていたようである。二人の交遊については、陸隴其の女婿である曹宗柱が、康熙三十年当時のことを次のように回想している。

辛未の歳、柱從ひて京邸に遊ぶ。公の公務少や閒あれば、輒ち大全諸書を同郷の朱竹垞、同年の李厚菴兩先生の處に讀み、覺めて藏本有れば、朝に稽へ夕に考へ、倦色有ること罔きを觀る。「辛未歳、柱從遊京邸。觀公公務少閒、輒讀大全諸書於同郷朱竹垞、同年李厚菴兩先生處、覺有藏本、朝稽夕考、罔有倦色。」(『四書講義困勉錄』「困勉錄跋」)

陸隴其は、北京において李光地、朱彝尊らと交遊を結び、暇を見つけては、彼らの邸宅で『四書大全』を讀んでいた。これは彼らが『四書大全』を四書解釈の規範とする共通認識を持っていたことを示している。したがって『四書大全』は、官界においては依然として影響力を持っていたと言えるのである。

それでは彼らは『四書大全』をなぜ評価したのか、二人の文章からこのことを明らかにしてみよう。まず陸隴其を見ると、彼は『四書大全』が編纂された永樂年間の學術界について、次のように評価している。蓋し當時は宋元諸儒の理學大いに明らかなるの後

を承け、黑白昭然たり。堂に登り室に入るの士にして、然る後に能く聖人の道を知るを必ひず。永樂の政、未だ此の時より善き者有らざるなり。成宏より以上、學術は一にして風俗は同じ。豈に其の明效に非ざるか。「蓋當時承宋元諸儒理學大明之後、黑白昭然。不必登堂入室之士、然後能知聖人之道。永樂之政、未有善於此時者也。自成宏以上、學術一而風俗同。豈非其明效耶。」(『松陽鈔存』卷下)

彼によれば、当時は宋元の遺風がのこっていたため、多くの学者が聖人の道を理解していたとする。これは胡廣らに対する批判をかわそうとするねらいがある。つまり彼は時代の風潮を観察することによって『四書大全』を当時の學術を代表するものとして評価したのである。これと同様の評価は、李光地にも見ることが出来る。彼は次のように言う。

明の正嘉より以前、程子全書、朱子文集語類、尚ほ未だ盛行せず。學者の讀む所は、只だ是れ大全及び性理のみ。而れども其の時の士風質實なれば、或ひは膚淺たりと雖も、却って背戾すること少し。「明自正嘉以前、程子全書、朱子文集語類、尚未盛行。學者所讀、只是大全及性理。而其時士

風質實、雖或膚淺、却少背戾。」(『榕村語錄』卷二十二「歴史」)

李光地もまた『四書大全』価値を当時の知識人の風氣から論じている。二人の『四書大全』評価は、清初だからこそ生まれたものであろう。当時は、康熙帝を中心とした朱子学振興策がおこなわれていた。その際に、陽明学流行以前に編纂された『四書大全』は、「盛世」の學術として尊重されたのである。陸隴其らが時代風潮によって『四書大全』を評価したのは、こうした時代の要請があつたのではないだろうか。

以上、陸隴其の経歴にしたがつて、彼の四書解釈の変遷について見てきた。彼が『四書大全』を学問の根底に維持し続けたことは、当時の學術界を反映したものであつた。だからこそ彼の四書解釈は知識人に広く受け入れられたのである。呂留良もまた知識人に大きな影響を与えているが、彼の場合は、あくまでも遺老であり陸隴其とは立場が異なっている。この二人の違いは、やはり清朝における処世の差に結びつくのである。陸隴其は呂留良の子呂葆中に対し「不佞 尊公先生の學に服膺すること、飢渴の如き有り。同じからざる所は出處のみ。(不佞服膺尊公先生之學、有如飢渴、所不同者出處耳。)」(『三魚堂文集』卷六「與呂無

黨書」と言う。この「出處」こそが、清朝における二人の評価を分けたものであろう。遺老として世を終えた呂留良が、朝廷に対して批判的であつたのに対し、陸隴其は清朝という新しい王朝に対しても参加すること、新しい学術を担う四書解釈を生み出そうとしたのである。

おわりに

ここまで陸隴其の経歴にしたがつて、彼の四書解釈がどのように変化したか考察してきた。彼の解釈の変更には、科挙受験など経歴の節目が大きく関わっている。ただし解釈は時期によって変更するものの、その根底には一貫して『四書大全』に対する敬意が存在していた。この点については、呂留良とは大きく異なっている。二人は陽明学や劉宗周一派に対する批判においては一致していたが、『四書大全』に対する評価では結局重なることがなかつたのである。容肇祖は陸隴其の思想を呂留良と同一のものとして評価し、呂留良の思想が彼を通して清朝に受け入れられたと考えている⁷。しかし『四書大全』の例からわかるように、『四書大全』の評価については、二人の認識は大きく異なつて

おり、二人の思想を同一視することはできないだろう。この点から言えば、むしろ李光地の方が陸隴其との共通点が多いと言えるのである。当時康熙帝を中心に朱子学振興が図られてはいたが、明の遺老である呂留良の思想が、そのまま清朝に受け入れられることは難しかったのではないだろうか。

陸隴其の場合は、その解釈が広く受け入れられる要素があつた。彼の四書解釈は、康熙年間以降も『四書大全』との関わりを持ちながら、知識人に受け入れられていった。例えば、汪份の『澁喜齋增訂四書大全』は、『三魚堂四書大全』とほぼ同じ方針によつて編纂されている。さらにその中には呂留良の八股文批評とともに『四書講義困勉録』が多く引用されているのである。この後、清朝における『四書大全』のテキストとしては、陸隴其と汪份のものが盛行するようになっていく。その結果、『三魚堂四書大全』は康熙年間以降の四書解釈において権威的な役割を果たしていくのである。

陸隴其の解釈が、このように影響力を持ったのは、第一章で述べたような二つの側面を持つていたからではないだろうか。彼は科挙との関わりの中で、幸運にも流行選家である呂留良とのつながりを持つようにな

る。その結果、陸隴其は呂留良とともに、挙子たちの支持を獲得することができたのである。その一方で、『四書大全』に対する敬意に示されるように、彼は呂留良にはない穏当な側面も持っていた。その意味では、彼が死後に評価される準備は整っていたのである。雍正年間になると、呂留良の著作が文字の獄を引き起こす一方で、陸隴其は「醇儒」として孔廟に従祀されるようになる。これは二人の四書解釈がもたらした結末と言えるのではないだろうか。

注

- 1 浅井邦昭「八股文選家としての呂留良」(『金城学院大学論集人文科学』第三十七号 二〇〇四年)
- 2 滝野邦雄「李光地の眼から見た陸隴其と于成龍」(『経済理論』三百四号 二〇〇一年)
- 3 今回は年譜として『陸隴其年譜』(中華書局 一九九三年)を使用する。この書は、『陸稼書先生年譜』(吳光酉原本 郭麟増補)および『長泖陸子年譜』(陸禮徵、陸宸徵原本 周梁訂)などを収録する。これらの年譜では、呂留良の記事を憚って削除したテキ

ストが多い。『陸隴其年譜』ではこの部分を校正してあるため、今回はこのテキストに基づいて論じることにする。

- 4 容肇祖『呂留良及其思想』(崇文書店 一九七四)
- 5 前出の滝野氏論文では、官途における二人のつながりについて論じている。
- 6 この書簡は、呂留良を憚るため多くの刊本で削られている。
- 7 容肇祖前掲書